

キャラクター名
飛白疵 七謎(かすりきす ちめい)

プレイヤー名

シンドローム	ソラリス ハヌマーン		ワークス	UGNエージェントD	カヴァー	小説家
	オプション		年齢	28	性別	女
覚醒	素体	衝動	恐怖		初期侵食率	42 %
出自	親戚と疎遠	経験	力の暴走	邂逅	読者	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	24
肉体	1	0	0			1	行動値	19
感覚	1	0	0			1	(非装備時)	19
精神	2	0	0			2	戦闘移動	24
社会	4	1	0		4	9	全力移動	48

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC	1		交渉	1	
回避			知覚	1		意志			調達	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:	UGN	1
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
機末新銃剣・刀鳴銃風 (はくまつぐらんギニョル・はなとちるらん)	交渉	9r+1		30		1+2+3+6+7 装甲無視
	交渉	12r+1		48		1+2+3+4+6+7 オバドで全Lv+2 装甲無視 敵判定ダイス-7D

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
実験体	P	N		
葛城陸奥	P 信頼	N 不安		
担当編集	P 信頼	N 食傷		
鬼殺鴉	P 誠意	N 悔悟		
魍	P 好奇心	N 不安		
鶴義	P 尊敬	N 隔意		
マリア	P 連帯感	N 脅威		

最大財産P: 20 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
コンセントレイト:ソラリス	2	2	メジャー	-	自身	自動	-	
効果: C値-Lv (下限7)								
絶対の恐怖	5	3	メジャー	視界	-	対決	-	
効果: 射撃/攻撃力+[Lv] 装甲無視								
神の御言葉	5	4	メジャー	-	-	対決	リミット	
効果: 攻撃力+[Lv×5]								
オーバードーズ	2	4	メジャー	-	-	-	100	
効果: 組み合わせたすべてのエフェクトLv+2								
先手必勝	5	4	常時	至近	地震	自動	-	
効果: 行動値+[Lv×3] LvUpしない								
風の渡し手	3	2	オート	至近	自身	自動	-	
効果: 対象をLv+1体に変更								
抗い難き言葉	4	2	メジャー	視界	単体	交渉	-	
効果: 射撃/命中時、判定ダイス-[Lv]D (シーン間)								
真偽感知	★							
効果:								
竹馬の友	★							
効果:								
声なき声	★							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

・コンセプト
とにかく《絶対の恐怖》《神の御言葉》で「自分で書いた恐怖小説で殴る」というキャラにしたかった。
勝手に個人的な縛りとして「イニシアチブプロセスにメイン行動」と「セットアップのエフェクト使用」を縛ってみた。
あと《タブレット》《多重生成》も使いたくなかった。正直使えばよかった。
【実験体】社会全振りで驚異の社会9である。情報判定はまかせろー(バリバリ)。
範囲攻撃で馬鹿みたいに100点も200点もばら撒いても仕方ない(他のPCの楽しみがない)ので
ダメージは純粋に《絶対の恐怖》と《神の御言葉》だけで稼ぐと割り切ってダメージレースからは撤退。
《オーバードーズ》《抗い難き言葉》で雑にダイス減らすことにしました。どうせ判定-7Dくらいクライマックスじゃ嫌がらせにもならないでしょう。

コンボ1:
「……花発多風雨・人生足別離(はなひらいてあらしあり、ひとあゆみてわかれあり)」
飛白疵の手首が振り、ペン先が虚空に文章を綴る。
空を切る筆が描く文字色とは、すなわち不可視である。
しかし、目にするものは見るだろう——硝子色の文章が、確かに虚空に刻まれていく様を。
そして、読んだものは知るだろう——有り得ざる虚影が、確たる現として世に出る様を。

『だんだら羽織を朱に染めた若武者たちが、刀を担いで闊歩する。
幕末の京都には珍しくもなかった、壬生狼の群れである。
ただし——鉢がねを巻く面差しは髑髏のそれであり、地を踏み鳴らすのは雪駄の裏地ではなく——がしゃがしゃと軋む骨の音である。
御用改めで挙げた御首か、血染めのしゃれこうべを掲げて屍武者がカタカタと唾う。
「この杯(されこうべ)を受けてくれ。血潮をなみなみつがせておくれ』